

熊野観心十界曼荼羅とそのルーツ (X)

——階層的クラスター分析による別本・模写本の位置づけ——

宮 川 充 司*

The Kumano-Kanjin Jikkai Mandala and Its Roots (X):
Locations of Replica and Other Variations on Oguris's Classification
of the Historical Pictures by Hierarchical Cluster Analysis Technique

Juji MIYAKAWA

熊野観心十界曼荼羅の体系的な研究は、小栗栖（2004，2011）において完成の闕に至ったといつて過言ではない。小栗栖（2011）の新しい分類枠では、小栗栖（2004）以降新たに所在確認がされた10例の定型本を加えた42例の定型本を、甲系統をⅠ～Ⅴ形式（称名寺本を独立の甲系統Ⅳ形式として追加）、乙系統をⅥ～Ⅹ形式（長学院本・宝泉院本・安養寺本を乙系統Ⅷ形式として、独立の形式を分離追加）、正覚寺本を甲系統の流れに分類できる可能性を示唆しながら当初の分類枠を維持し丙系統Ⅺとした。非定型本には、蓮化寺本・松念寺・東横田旧十王堂本・崇禪寺本・六道珍皇寺乙本・豊樂寺本・天福寺本の7例の模写本、大蔵寺甲本・大蔵寺乙本・勝久寺本・六道珍皇寺甲本・牛蓮寺本・蓮蔵寺本・盛福寺本・長命寺穀屋寺甲本・長命寺穀屋寺乙本の9例の別本に分類できる。小栗栖（2011）によると、模写本は、定型本と比べると全体的に色彩が淡彩で、折り畳んで持ち歩いたことによる痕跡とされる折筋がない。別本の場合、長命寺穀屋寺甲本・長命寺穀屋寺乙本は折り畳んだ保管状態で発見（おそらく絵解きに持ち歩かれた）されたために折筋があるが、他の7例には折筋がない。また、別本はそれぞれに図柄的にも独自性が強いものであると論じている。

小栗栖（2011）による熊野観心十界曼荼羅定型本の新しい分類枠の適合性を検討するために宮川（2011）は、小栗栖が提示している熊野観心十界曼荼羅の構成要素を数値コード化しそれを基礎データとして、組織的な分類を行う時に使用される統計学の多変量解析のテクニック、階層的クラスター分析を適用して、小栗栖（2011）の分類枠の検証を行った。階層的クラスター分析の結果形成された樹型図（デンドログラム dendrogram）を見たところ、小栗栖の新分類とは若干異なる結果も部分的に見られたが、大筋では小栗栖の新分類の適合性を支持する結果であった。小栗栖の新分類で乙系統Ⅸ形式に分類されていた正念寺本は、乙系統Ⅹ形式への過渡的な段階のものと見なされ、乙系統Ⅹ形式に分類す

* 教育学部 子ども発達学科

ることができた。また、丙系統Ⅺ形式として分類されている正覚寺本は、甲系統と別の系統というより甲系統の発展系と位置づけることも可能ではないかという点が、小栗栖(2004, 2011)の分類とは大きく異なった結果であった。

熊野観心十界曼荼羅別本、長命寺穀屋寺甲本・乙本の分析

2009年この研究分野で画期的な発見があった。近江八幡市資料館が、西国三十三観音霊場三十一番札所として著名な長命寺山内にある子院、穀屋寺の文書を調査中に、袈裟箱のような規格の黒漆の木箱が見つかった。その真塗の箱の中に折り畳まれた状態で、3点の長命寺参詣曼荼羅と2点の熊野観心十界曼荼羅に類似した絵画が、仕舞い込まれていた。長命寺参詣曼荼羅は、それまで2点の存在が知られていたが、新たに3点の所在が追加された。3点の制作年代を異にする長命寺参詣曼荼羅は、制作年代の古い順に長命寺参詣曼荼羅穀屋寺甲本・乙本・丙本と名付けられた。また、熊野観心十界曼荼羅に類似した絵画は、詳細な調査鑑定を行った小栗栖(2011)により、熊野観心十界曼荼羅の別本として分類され、同様に制作年代の古い順に長命寺穀屋寺甲本・乙本と名付けられた。甲本は江戸時代初期と制作年代が推定され、その比較的忠実な江戸時代後期の模写と推定されるものが乙本である。特にこの2点の絵画は、従来全く知られていないものであった。さらにこれら5点の絵画の学術上の価値は、その表具の状態にもあった。それらは、いずれも軸装ではなく、長命寺穀屋の勧進比丘尼が折り畳んで絵解きに持ち歩いた当初の状態と推定できる表具で発見された。これらの絵画の表具状態については、小栗栖(2011)に詳細な報告がされている。長命寺穀屋寺甲本・乙本は、別本の中では他と異なり定型本のきわめて基本的な属性と共通項を持った顕著な作例である。図柄は、全体的には定型本の構成要素を維持しながらも、図像的な部分構成は独自のものを持っている。定型本以外の他の別本あるいは模写本の作例と比べて、むしろ定型本の重要な属性である①一定の様式で折り畳まれていた痕跡を示す折筋(そもそも定型本の武久家本・個人蔵本と同等に、折り畳んで持ち歩いた当初の表具と実際に折り畳まれた状態で発見されている)、②金泥銀泥で彩色された日輪・月輪など、定型本との基本的な共通属性を持っている。

小栗栖(2011)によると、この長命寺穀屋寺甲本・乙本は、全体的特徴から定型本甲系統の特徴が濃いとする。黒雲に乗り亡者をさらう獄卒、閻魔大王、白杵、火柱、太鼓を叩く獄卒、子は三界の首枷が描かれていない。老いの坂に谷筋を描く写実性、三途の川に架かる橋が平橋、賽の河原の地藏菩薩が連弁に乗ること、産屋が妻入りであること、心字と結ばれる菩薩が施餓鬼棚左右の天女でないこと等の特徴は、定型本甲系統との共通項であるとしている。

熊野観心十界曼荼羅別本と位置づけられる長命寺穀屋寺甲本の表現特徴は、全体的印象としては熊野観心十界曼荼羅の甲系統、特に興善寺本・日本民藝館本の属する甲系統Ⅰ形式との類似性が高いものと判断できる。産屋の女性が盥に自分の両足を入れその上に赤子を入れようしている不思議な光景は、甲系統Ⅰ形式のものと別本六道珍皇寺甲本にのみ描かれている光景で江戸初期に普及した産婆による産湯の様式であり、その後の定型本甲系統Ⅱ形式以降で描かれる赤子の沐浴場面ではない(宮川, 2008)。産屋の女性が鉢巻きをしていない点や産屋の廊下に欄干が描かれていない等細かい点は甲系統Ⅰ形式と異なるも

の、別本六道珍皇寺甲本と合せて基本的表現様式は極めて類似している。

長命寺穀屋寺甲本・乙本の表現形式が、熊野観心十界曼荼羅定型本甲系統の表現形式と類似している点が多いことは確かであるが、一方で定型本乙形式との共通項も見られるのではないかということを、宮川（2013）で指摘した。

①老いの坂上りの人生の始まりを表す鳥居から4人目の子どもと、下りの人生の終着点を表す鳥居から手前4人目の男性が、袈の前身である肩衣で描かれる。

②地獄の釜の串刺しにされる亡者が2人描かれる。これは、乙系統の一部の表現様式である。甲系統のものは、口から尻方向に槍で串刺しにされ、乙系統はその他の方向で串刺しにされている。小栗栖（2011）の分類で甲系統から乙系統への過渡的な時期に当たる乙系統VI形式の3点と乙系統VII形式の阿弥陀寺本の乙系統4点が、甲系統と乙系統それぞれに特有の串刺しの両方が描かれる2人の亡者で描かれている。

一方で、長命寺穀屋寺甲本・乙本とも、定型本とは異なる独自の画像的属性を有している（小栗栖，2011）。それ故に、別本である。

①仏界菩薩界は、定型本では施餓鬼棚の上部に来迎の阿弥陀として、中央に阿弥陀、左右に観音勢至菩薩、薬王薬上菩薩が描かれるが、これが長命寺穀屋寺本では天台様式の三仏（釈迦・薬師・阿弥陀）と観音勢至菩薩で描かれ、薬王薬上菩薩が描かれない。

②差し羽をかざした僧形で描く縁覚が向かって左、経机で経文を広げる声聞が向かって右に描くところは甲系統の特徴であるが（埴岡，2005）、その背後の樹木が杉ではなく通常は縁覚の背後樹である桜に入れ違っている。一方、縁覚の背後樹は失われている。

③老いの坂の四季を表す樹木に、若柳が欠落している。

④寒地獄に描かれる白い氷が、赤く彩色されている。

⑤三途の川に架かる奈河橋上の亡者が、男性は色衣女性に浄衣で描かれるが、定型本では男女とも浄衣。

⑥賽の河原の位置が、施餓鬼壇左脇に描かれるが、定型本では施餓鬼壇の直下中央に描かれる。

この⑤と⑥は、小栗栖が指摘しているように禅林寺本十界図と表現方法の細部を含めて酷似している。

⑦老いの坂の入り口の鳥居から3人目の男児が、竹馬（ただし、切り出した竹ではなく、竹の棒で、笹の小枝はない）に跨がって遊ぶ童として動的に描かれている。定型諸本では、この子どもに相当するのは梅の小枝か扇を持っている童として描かれている。

⑧老いの坂下りの2組目の男女のペア、特に女性が長傘を手に持った尼形で描かれているのが独自である。定型諸本の場合、この位置の男女は公家装束の男女で、女性は十二単の装束で描かれる。さらに、この長傘を持った尼は、同時に発見された長命寺穀屋寺甲本長命寺参詣曼荼羅の中心に描かれている尼と酷似している。長命寺穀屋寺甲本長命寺参詣曼荼羅は、小栗栖（2011）図版46を参照のこと。

さて、次に長命寺穀屋寺本熊野観心十界曼荼羅の甲本と乙本の差異について触れる。

小栗栖（2011）によると、熊野観心十界曼荼羅の別本である長命寺穀屋寺乙本は、

①甲本に比べて乙本は色彩が淡彩

②老いの坂初めの這う赤子が、甲本では定型本と同様裸で、乙本では腹巻きを着している。

③乙本では絵の上部の日輪・月輪の側に「江州 長命寺」と記されているが、甲本にはない。この5文字の記し方は、上記の長命寺参詣曼荼羅の長命寺穀屋寺甲本・乙本にも共通に記されている。

上記の小栗栖の指摘以外に、細かな差異であるが、

④施餓鬼壇上の心字の字体が甲本は草書体、乙本は行書体。高橋（2007）によると、定型本甲系統では心字は行書体、乙系統では草書体という指摘から、甲乙の年代的関係が逆転しているように思われる。

⑤老いの坂の這う赤子から4人目の男子の装束が、甲本では肩衣（室町後期に生まれた袴の前身）と長袴を着しているが、乙本では袴で描かれている。

といった差異があるが、これらは甲本・乙本の微々たる差異であり、それ以上に共通項の方が遙かに多い。なお、長命寺穀屋寺乙本は、図1に本紙を示すが、甲本については滋賀県立近代美術館・愛媛県立美術館・世田谷美術館（2010）や小栗栖（2011）・宮川（2013）にカラー図版が掲載されているので、それらを参照していただきたい。

次に、宮川（2013）は、宮川（2012）で作成した熊野観心十界曼荼羅定型本の構成要素に、長命寺穀屋寺甲本の構成要素のデータを加え、その分類上の位置づけを階層的クラスター分析により分析の試みを行った。その分析により形成された樹形図を見ると、長命寺穀屋寺甲本は、定型本甲系統と乙系統の中間的・過渡的な位置に位置づけることができ、甲系統からの発展系とも位置づけられる丙系統XI形式の正覚寺本に近い位置づけを与えることができるものであると推定した。ただし、長命寺穀屋寺甲本は、熊野観心十界曼荼羅の原型とも推定されている別本六道珍皇寺甲本（江戸初期の制作）、あるいは定型本甲系統のルーツの1つとも推定されている禅林寺本十王図（室町時代ないし江戸時代前期）の制作との類似性・共通性が高い（小栗栖，2011）ので、長命寺穀屋寺甲本の位置づけについては、さらに別の別本データを加えての総合的な分析が必要であるように考えられる。

熊野観心十界曼荼羅模写本の位置づけと分析

小栗栖（2004，2011）によると、非定型本には、六道珍皇寺甲本・長命寺穀屋寺甲本乙本といった別本以外に、蓮化寺本・松念寺・東横田旧十王堂本・崇禅寺本・六道珍皇寺乙本・豊楽寺本・天福寺本の7例の模写本がある。小栗栖（2011）によると、模写本は、定型本と比べると全体的に色彩が淡彩で、折り畳んで持ち歩いた痕跡である折筋がない。蓮化寺本・松念寺は、定型本甲系統Ⅰ・Ⅱ形式・乙系統Ⅶ～Ⅸ形式、丙系統XI形式の模写ではないか、東横田旧十王堂本・崇禅寺本・六道珍皇寺乙本は乙系統X形式、豊楽寺本乙系統Ⅵ形式、天福寺本は乙系統Ⅸのものを模写したのではないかと推定されている。

上記の階層的クラスター分析のもう1つの適用として、模写本についての分析が可能であると考えられる。特に、模写本の方が別本よりも、定型本と共通項目が多く統計的技法による分析はるかに容易と考えられる。また、小栗栖による模写本の記述のように、模写本はその画像的特徴から、模写した定型本の原本の推定を行うことが可能と考えられるが、とすると階層的クラスター分析の適用によっても模写した原本の系統・形式の推定を行うことができるのではないかと考えられる。

そこで、上述の別本の分析に、さらに模写本のデータを加えた分析の試みが意義がある

熊野観心十界曼荼羅とそのルーツ (X)



図1 長命寺穀屋寺乙本熊野観心十界曼荼羅 (別本) 142.1×114.1



図2 天福寺本（模写本）136.7×130.2



図3 六道珍皇寺乙本（模写本）158.3×139.8 写真提供小栗栖健治氏

と考えられるので、今回別本として長命寺穀屋寺甲本・乙本に加え、模写本として天福寺本と六道珍皇寺乙本を分析の対象として選択した。天福寺本及び六道珍皇寺乙本については、図2・図3に表示する。六道珍皇寺乙本の画像は、兵庫県立歴史博物館館長補佐の小栗栖健治氏より提供を受けたものである。

天福寺本は、香川県高松市に所在する真言宗の古刹所蔵のものである。六道珍皇寺乙本は、京都市の臨済宗六道珍皇寺に所蔵される2例の熊野観心十界曼荼羅のうちの1つであり、毎年8月7日～10日の六道参りの期間境内で公開されているものである。小栗栖(2011)は、両模写本とも19世紀の制作と推定している。天福寺本が、他の模写本と異なる特色の1つは、画像の構成要素が定型本乙系統の比較的忠実な模写であることを示すだけでなく、定型本乙系統Ⅶ～Ⅹ形式の階段状の紙継ぎまで、踏襲しているという点である。天福寺本の画像構成で、特異な点は①左中央の産屋の男女の衣服が男女とも色衣、②老いの坂上りの下から3人目の女兒が扇を広げている、③老いの坂下り下から6人目の老婆の手を引く子どもが、髪が描かれず小比丘尼のように描かれている。④画面左上の黒雲に乗る獄卒がさらっていくのは通常は男性(夫)であるが、天福寺本は女性で描かれている。また、⑤左下に描かれる鉄室が欠如しているといった固有の表現が見られるが、後は日輪月輪の色彩を除き、定型本乙系統の比較的忠実な模写本と考えることができる。六道珍皇寺乙本は、日輪月輪の色彩の他、老いの坂に描かれる人が、乙系統Ⅶ～Ⅹ形式のものが通常24人で描かれるところが28人で描かれ、特に七子結(元服つまり加冠の儀の水引を伸ばした冠)の男子まで通常5人の子どもで描かれるところ、9人の子ども(刀を差した子どもが3人手前に描かれている)が描かれているところが特異である。それ以外は定型本乙系統の比較的忠実な模写本と考えることができる。別本・模写本とも、筆者が原本調査ないし熟覧を行ったことがない作例が含まれ分析のための基礎データが構成できないものが含まれているので、今回はこの4例のデータを試験的に追加して分析することとした。

分析方法：熊野観心十界曼荼羅の定型本・別本・模写本の階層的クラスター分析

宮川(2012, 2013)による階層的クラスターの分析で使用した40項目に、特に模写本と定型本との差異を表す項目として、①日輪・月輪の彩色、②本紙の折筋の有無、③産屋の浄衣、④彩色の濃淡の4変数を加えた。これらの変数の概要と長命寺穀屋寺甲本・乙本、天福寺本・六道珍皇寺乙本を表1に示す。長命寺穀屋寺甲本・乙本は、この表のように基本的変数に関してはすべて同一の数値コードとなっている。

これらの44変数データに、階層的クラスター分析を適用して、樹形図(dendrogram デンドログラム)を出力させそれにより、別本長命寺穀屋寺甲本・乙本、模写本天福寺本・六道珍皇寺乙本を加えて分析し、それらの樹形図上の位置づけから、小栗栖の新分類の適合性を検証する。なお、基礎とした40変数の詳細な説明は、宮川(2012, 2013)を参照いただきたい。

階層的クラスター分析は、パソコン版SPSS(社会科学用統計パッケージ)バージョン18.0の多変量解析プログラムのオプション、「分析」「分類」「階層クラスタ」に含まれる階層的クラスター分析(hierarchical cluster analysis)の手法により、樹形図を描く手法で

表1 分析に使用した項目とカテゴリー化の変換コード

変数番号	項目	変換コード
1	杉の木の形式	形式1 = 1 形式2 = 2 形式3 = 3 形式4 = 4
2	黒雲に乗る獄卒の有無	無 = 0 有 = 1
3	黒雲の獄卒が亡者をつかむ場所	黒雲の獄卒無 = 0 腕 = 1 髪 = 2 足 = 3
4	阿弥陀如来の印相	中品上生 = 1 合掌 = 2 下品上生 = 3 上品上生 = 4 *
5	声聞と縁覚の桜の場所	左 = 0 右 = 1
6	線が示す菩薩の場所	観音勢至 = 1 天女 = 2 観音 = 3 * 不詳 = 0
7	館の山の有無	無 = 0 有 = 1
8	館の屋根	広い = 1 狭い = 0
9	館の欄干	階段 = 1 すやり霞 = 2 出入り口なし = 3
10	(館の) 赤子の状態	抱く = 1 盥の中 = 2 盥に入れるところ = 3
11	老いの坂に描かれる人数	22 = 22 23 = 23 24 = 24 25 = 25 27 = 27 20 = 20 *
12	貴族風の男性の顔の向き	左 = 1 右 = 2 不詳 = 0
13	老いの坂を振り返る女性	振り向かない = 1 右 = 2 左 = 3 不詳 = 0
14	仏供と三具足の位置	間 = 1 前 = 2 五具足前と間 = 3 *
15	施餓鬼供養の少年の有無	無 = 0 有 = 1
16	釈迦如来の印相	施無畏・予願印 = 1 説法 = 2 不詳 = 0
17	人道の人数	3 = 3 5 = 5
18	剣の山の獄卒の採り物	鉾 = 1 棍棒 = 2 鎌 = 3
19	剣の山の獄卒の衣装	褌 = 1 鎧 = 2 虎皮の腰巻き = 3
20	閻魔王の有無	無 = 0 有 = 1
21	閻魔王の顔の向き	正面 = 1 右 = 2 無 = 0
22	不産女地獄の形状	平面 = 1 台上 = 2
23	不産女地獄の場所	左上 = 1 右下 = 2 左中 = 3 *
24	賽の河原の地藏菩薩の乗物	蓮弁 = 1 蓮台 = 2
24	地獄の鳥居と賽の河原の境	山状 = 1 雲 = 2 なし = 0 *
26	三途の川に架かる橋の形	平橋 = 1 反り橋 = 2
27	火柱の男性の向き	無 = 0 背中 = 1 胸 = 2
28	火車に乗る人数	0 = 0 1 = 1 2 = 2 3 = 3
29	串刺しにされる人数	1 = 1 2 = 2
30	串刺しの方向	口から尻 a = 1 それ以外 b = 2 両方 a + b = 3 *
31	畜生道の人面	獣面 = 1 人面 = 2
32	両婦地獄の男性の顔の向き	横倒し = 0 正面 = 1 左 = 2
33	子は三界の首枷の場所	無 = 0 左上 = 1 右下 = 2
34	太鼓を叩く獄卒の衣装	無 = 0 褌 = 1 上衣・褌 = 2 鎧 = 3
35	鉄室の棟の方向	/ = 1 \ = 2 なし = 0 *
36	声聞・縁覚の配置	縁覚左・声聞右 = 1 縁覚右・声聞左 = 2
37	畜生道の貝の有無	無 = 0 有 = 1
38	料紙の紙継ぎ	一列 = 1 階段 = 2
39	二升地獄の有無	無 = 0 有 = 1
40	老いの坂の鳥居の有無	無 = 0 有 = 1
41	日輪・月輪の色彩	金銀 = 1 赤白 = 2 その他 = 3
42	本紙の折り筋	無 = 0 有 = 1
43	産屋の浄衣	女性のみ = 1 男性のみ = 2 男女とも浄衣 = 3
44	全体的な色彩の濃淡	濃彩 = 1 淡彩 = 2

- 注 1) 変数1～35: 小栗栖 (2011) pp. 178-179の表5の項目番号による
 2) 変数36～38: 小栗栖 (2011) pp. 197の表8の特色8～10による
 3) 変数39・40筆者追加 変数39の二升地獄は正覚寺本のみ描写あり
 変数40の老いの坂で出口・入り口の鳥居で興善寺本のみ描写がなく、他の定型本には描写あり
 4) *は、長命寺穀屋寺本の分析のために固有のカテゴリーを追加
 5) 変数3の「黒雲の獄卒が亡者をつかむ場所」の亡者は定型本では男性であるが、天福寺本のみは女性

熊野観心十界曼荼羅とそのルーツ (X)

	穀屋寺甲本	穀屋寺乙本	天福寺本	六道珍皇寺乙本
不詳 = 0	1	1	4	4
	0	0	1	1
	0	0	2	2
不詳 = 0	4	4	1	1
	1	1	1	1
	3	3	2	2
	0	0	0	0
	1	1	0	0
出入口あり = 4 欄干なし = 0 *	0	0	4	3
	1	1	2	2
28 = 28	20	20	24	28
	2	2	1	1
	2	2	2	2
	3	3	1	2
	0	0	0	1
	1	1	2	2
	3	3	5	3
	1	1	2	2
	1	1	3	3
	0	0	1	1
	0	0	2	2
	1	1	1	1
	3	3	1	1
	1	1	2	2
	0	0	2	2
	1	1	2	2
	0	0	2	2
	2	2	1	1
	2	2	1	1
	3	3	2	2
	1	1	2	2
	1	1	2	2
	0	0	2	2
	0	0	1	1
	0	0	0	1
	1	1	2	2
	0	0	0	0
	1	1	2	1
	0	0	0	0
	1	1	2	1
	1	1	2	2
	1	1	0	0
男女とも色衣 = 4 不詳 = 0	4	4	4	3
	1	1	2	2

6) 変数41~44は、定型本と模写本との典型的な相違点と考えられる変数

7) 変数41について、称名寺本は見かけ上日輪・月輪の彩色は赤白の彩色されているが、後補のものと鑑定できたので金銀としてコード化

8) 変数43について、貞観寺本のみ男女とも色衣で産屋の女性の赤横縞の衣は後補の可能性もあるが、未確定なので男女とも色衣でコード化
薬師庵本は不詳とした

分析した。統計量のオプションとしては、「クラスタ凝集経過行程」, 「クラスタ化の方法」に「グループ間平均連結法」, 「測定方法」に「平方ユークリッド距離」をオプションとして指定した。

①の日輪・月輪の彩色は、熊野観心十界曼荼羅の定型本では、本紙の上部左右に配置され、金泥銀泥で彩色されている。一方、7例の模写本、9例の別本のうち長命寺穀屋寺甲本・乙本を除いた7例が赤の日輪白の月輪あるいは他の色組で彩色されている（蓮蔵寺本が金白、盛福寺本が金金。なお、定型本での例外は、称名寺本（小栗栖の新分類では甲系統Ⅳ形式に分類）であり、日輪が赤、月輪が白で彩色されている。ただし、小栗栖健治氏・埴岡弓枝氏と称名寺本の原本調査したところ、この彩色は後補のもので、制作当初は金泥銀泥で彩色されていたと推定できたので（宮川、2011）、今回の分析では称名寺本の彩色は、金銀として数値コード化した。なお、金泥銀泥の日輪・月輪は、室町時代から盛んに作られた社寺参詣曼荼羅で多く見られる彩色で、赤白の日輪・月輪は江戸時代になってから次第に主流となっている彩色法と考えられる。熊野観心十界曼荼羅と対に用いられたと考えられる那智参詣曼荼羅は、現存例はいずれも金泥銀泥で日輪月輪が彩色されている。

②の本紙の折筋の有無については、定型本と別本長命寺穀屋寺甲本・乙本のみが折筋があり、他の別本および模写本には折筋が認められていない。

③の産屋の浄衣は、宮川（2008）で分析したもので、定型本では甲系統Ⅰ～Ⅴ形式と乙系統Ⅵ・Ⅶ形式までが女性のみ浄衣男性が色衣、乙系統Ⅷ～Ⅹ形式は男女とも浄衣、丙系統Ⅺ形式の正覚寺本が男性が浄衣女性が色衣と甲系統のものと逆転している。長命寺穀屋寺甲本・乙本は、男性の白衣の下に緋の着物が見られ、正式な浄衣ではないので、男女とも色衣としてコード化した。

④彩色の濃淡は、基本的に模写本は小栗栖（2004、2011）が指摘するように、全体が淡彩である。天福寺本は典型的な淡彩である。もう1つの模写本、六道珍皇寺乙本は、写真でみると最下部の地獄の火炎や闇穴が濃彩であるが、中央部分の彩色部分や上部の空部分が淡彩であるので、分析コードは淡彩とした。

分析結果と考察

以下の分析は、基本的に宮川（2012、2013）と同じく、階層的クラスタ分析の結果として出力された樹形図を中心に分析する。まず、構成した全44変数を用いた階層的クラスタ分析の結果を、図4に示す。縦軸に並ぶ番号は、熊野観心十界曼荼羅の定型諸本・別本・模写本の分析番号である。

全44変数を使用した階層的クラスタ分析により形成された樹形図から見てみると、宮川（2013）の分析とは異なり、別本長命寺穀屋寺甲本は、長命寺穀屋寺乙本を加えたことにより、正覚寺本とは若干異なる位置関係にある独立のクラスターを構成した。この樹形図では、丙系統の正覚寺本は、甲系統の1つの形式とも見ることが可能であるが、長命寺穀屋寺甲本・乙本は、明らかに定型本甲系統と乙系統の中間的属性をもった別のカテゴリーのものである。ただし、この樹形図では、定型本甲系統と乙系統の過渡的時期に制作されたものという見方の他に、定型本甲系統Ⅰ形式の興善寺本・日本民藝館本に近い位置

熊野観心十界曼荼羅とそのルーツ (X)

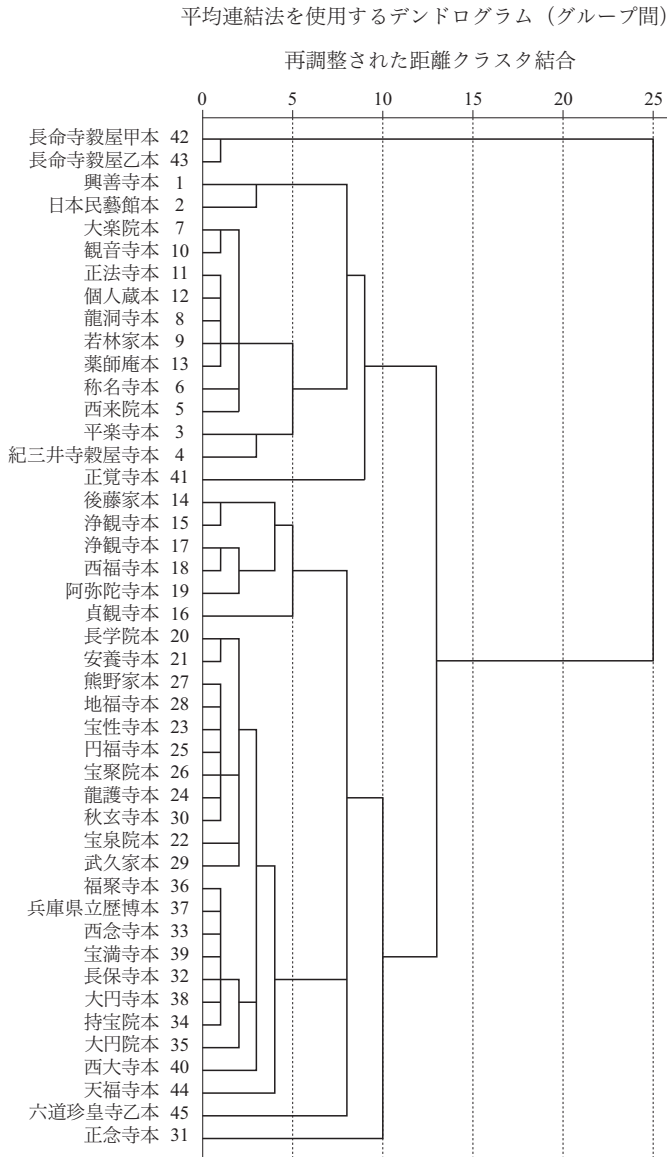


図4 44変数階層的クラスター分析による樹形図

関係もあるところから、長命寺穀屋寺甲本・乙本から定型本甲系統と乙系統が分岐していくという、定型本のルーツの1つと見なす読み方も可能と思われる。次に、模写本六道珍皇寺乙本は定型本乙系統全体のクラスターに繋がり、天福寺本は定型本乙系統Ⅷ～Ⅹ形式のクラスターに繋がるので、模写本についての小栗栖の考察と若干異なっている。また、欠損値の多い正念寺本、産屋の浄衣のパターンが特異な貞観寺本の分類上の位置関係がずれている。ここでは分析結果の表示を省略するが、変数43産屋の浄衣の変数のみ除去した分析をすると、貞観寺本は後藤家本・浄観寺本と同一のクラスターに収まるのである。

平均連結法を使用するデンドログラム（グループ間）

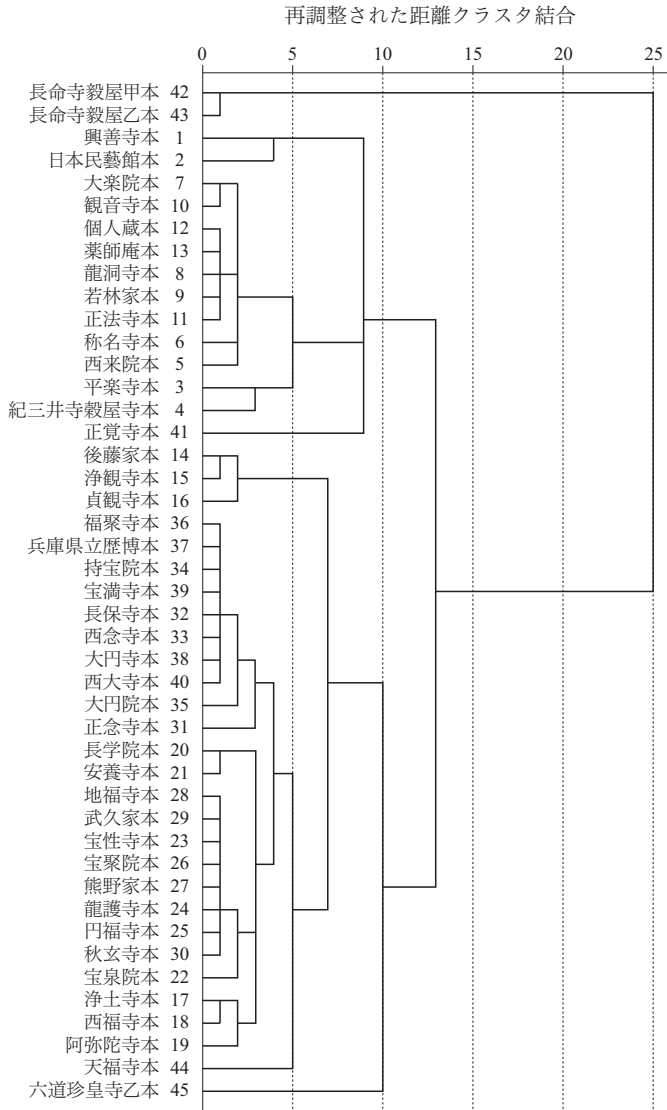


図5 37変数階層的クラスター分析（1・4・6・12・13・16・43除去）による樹形図

そこで、宮川（2012, 2013）と同様に、いずれかの諸本に部分的な剥落欠損等による不詳（実質的な欠損値）のある変数を除去した分析を実施した。不詳データのある変数1・4・6・12・13・16・43の7変数を除去した37変数による分析を実施した。宮川（2012, 2013）の変数除去と異なり、実質的な統計分析上の影響は薄い正覚寺本あるいは興善寺本の特徴を示す変数39・40は除去しなかった。その階層的クラスター分析の結果を、図5に示す。

長命寺穀屋寺甲本・乙本，定型本甲系統諸本，丙系統XI形式の正覚寺本の位置関係は基

熊野観心十界曼荼羅とそのルーツ (X)

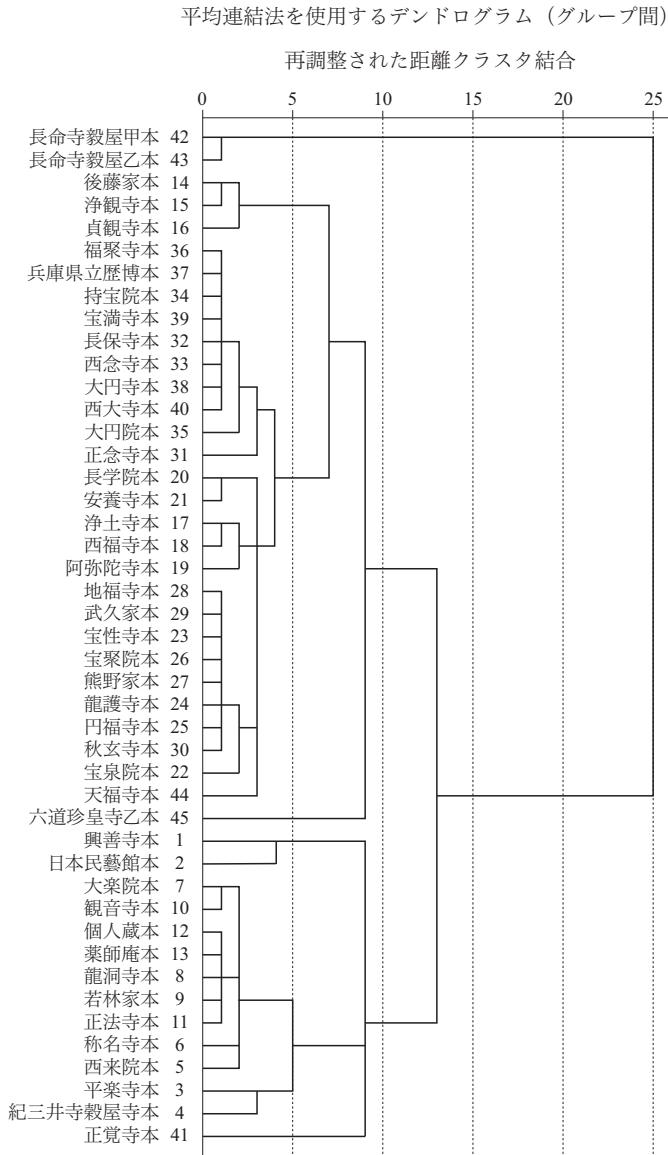


図6 34変数階層的クラスター分析 (1・4・6・12・13・16・41・42・43・44除去) による樹形図

本的に大きな変化がない。定型本甲系統Ⅰ形式の興善寺本・日本民芸館本、甲系統Ⅱ形式の平楽寺本・紀三井寺穀屋寺本は小栗栖の分類通りである。一方、小栗栖の新分類では甲系統Ⅲ形式の西来院本と甲系統Ⅳ形式の称名寺本は同一のクラスターに統合されている。また、甲系統Ⅴ形式に分類されていた7例の諸本は、2つの下位クラスターに分離している。大楽院本と観音寺本が1つの下位クラスター、龍洞寺本・若林家本・正法寺本・個人蔵本・薬師庵本がもう1つの下位クラスターに収まっている。さらに、丙系統Ⅺ形式の正

平均連結法を使用するデンドログラム（グループ間）

再調整された距離クラスタ結合

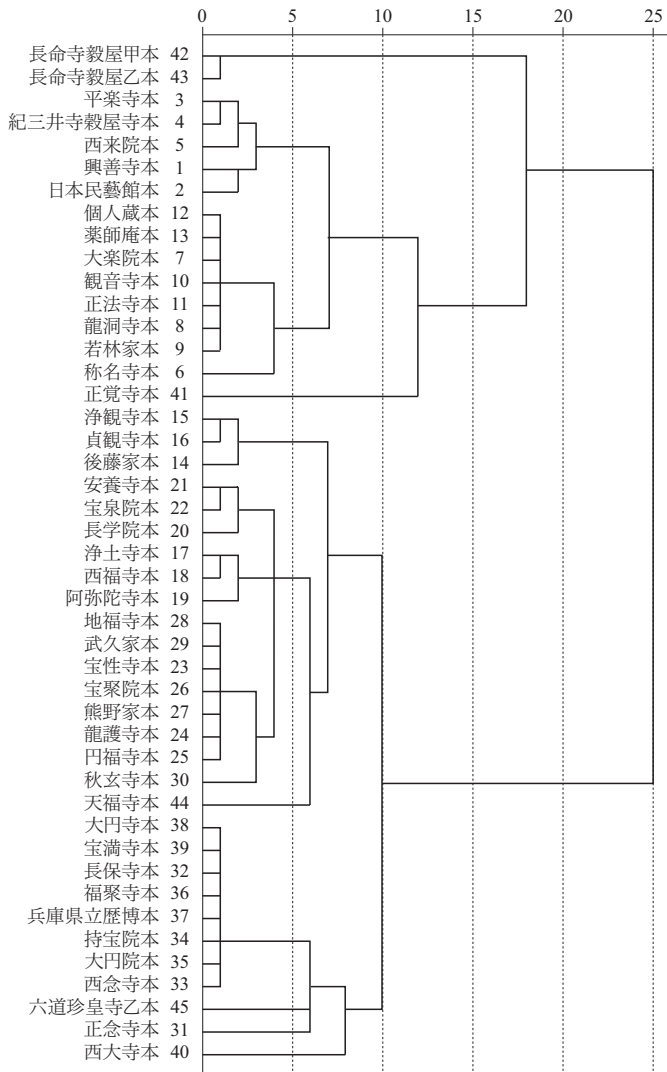


図7 15変数階層的クラスター分析（変数3・6・9・17・21・23・24・26・33・36・37・38・41・42・44で構成）による樹形図

覚寺本は、やはり甲系統の最期のクラスターという位置づけが可能と思われる。

次に、模写本である天福寺本・六道珍皇寺乙本と乙系統の諸本との位置関係は、貞観寺本が小栗栖の分類に近い乙系統VI形式の位置づけとなり、乙系統VIII形式の宝泉院本が乙系統IX形式に近いクラスターとなっている。正念寺本は乙系統X形式のクラスターに分類できる。模写本天福寺本は定型本乙系統VII～X形式に繋がるもの、模写本六道珍皇寺乙本は定型本乙形式VI～X形式に繋がるものとしての位置づけられているところに変化はない。

熊野観心十界曼荼羅とそのルーツ (X)

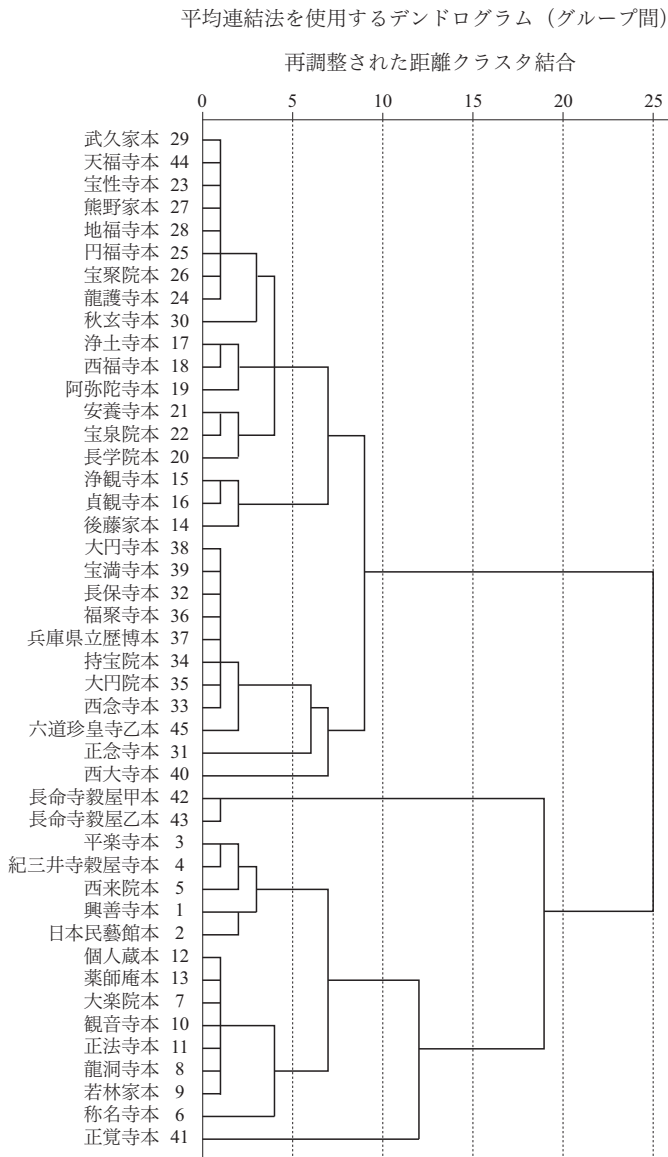


図8 12変数階層的クラスター分析 (変数 3・6・9・17・21・23・24・26・33・36・37・38で構成) による樹形図

次に、模写本の2例が乙系統のどの定型本に近いかを推定するために、図5の除去変数にさらに模写本と定型本の相違を捉えるために設定した変数41・42・44も分析変数から除去した34変数による分析を図6に示す。

その分析の結果、天福寺本は定型本乙系統IX形式に近いものとして位置づけることができた。これは天福寺本は定型本乙系統IX形式の模写本とした小栗栖 (2011) の推定通りの結果といえる。一方、六道珍皇寺乙本は乙系統X形式の模写というより、乙系統全体に繋

がり、乙系統X形式の次の段階の様式をもった模写本であると推定することができるのではないだろうか。

次に、宮川（2012）は、小栗栖（2011）の最も基本的な分類基準項目と呼んだ10変数（変数3・6・21・23・24・26・33・36・37・38）のみでは小栗栖の新分類枠に合致したクラスターが分離できないということから、定型本乙系統IX形式とX形式の差異を示す変数17（人道の人数）、甲系統I形式と他の甲系統を区別する変数9（館すなわち産屋の欄干）の2変数を加えた合計12変数による分析が、小栗栖の新分類に近いものとして指摘している。今回の分析では、模写本が含まれている関係で、これに定型本と模写本の区別をする変数41・42・44を加えた15変数が最小の変数による分類と考えられる。この15変数による階層的クラスター分析を参考までに図7に示す。

その分析の結果形成された樹形図を見ると、定型本甲系統の分類は小栗栖（2011）の分類通りのクラスターが形成されるとともに、丙系統XI形式の正覚寺本、および長命寺穀屋寺甲本・乙本の位置関係は先の分析と同じ位置づけを維持している。次に、定型乙系統諸本と別本の樹形図上の位置づけを見てみる。正念寺本が、前述の分析や宮川（2012, 2013）の分析と同様、乙系統IX形式ではなく西大寺本と同様乙系統X形式のクラスターに分類できること、また模写本天福寺本は乙系統Ⅶ・Ⅷ・IXに近いもの、六道珍皇寺乙本は乙系統X形式に近いクラスターに収まっていることが分かる。

次に、定型本と模写本の区別をする変数41・42・44を除いた12変数での階層的クラスター分析の結果を図8に示す。

この基本的な12変数による階層的クラスター分析により形成された樹形図をみると、作図上の甲系統と乙系統の構造が上下が入れ替わっているものの、基本的なクラスターの構造は大きく変化していないことがわかる。定型本と模写本との区別を示す変数を除いたことにより、天福寺本は定型本乙系統IX形式に位置づけられ、六道珍皇寺乙本は乙系統X形式のものに位置づけられていることがわかる。模写本の位置づけとしては、小栗栖（2011）の分類と正念寺本の分類上の位置づけを除けば、ほぼ小栗栖（2011）の新分類枠に近いものであることがわかる。

今回の分析では、熊野観心十界曼荼羅の定型諸本に近い別本長命寺穀屋寺甲本・乙本、模写本天福寺本・六道珍皇寺乙本を階層的クラスター分析を適用することで、その発展過程上の位置づけを探る科学的なアプローチを試みたが、この手法は質的な分析と平行利用することにより、十分有効な結果が得られるものと結論づけられるのではないだろうか。

謝辞

本研究の分析は、兵庫県立歴史博物館小栗栖健治先生の調査データを基盤にしている。執筆にあたり、小栗栖健治先生にさまざまなご助言を賜りましたことを記して感謝申しあげます。また、元興寺文化財研究所の高橋平明先生に貴重な情報提供をいただきました。長命寺穀屋寺諸本の調査にあたり、長命寺住職武内隆韶様並びに近江八幡市立資料館の方々にお世話になりました。天福寺住職松下龍雄様、六道珍皇寺住職坂井田良宏様にはご什宝の調査と写真掲載にあたり、お世話になりました。記して感謝申し上げます。

引用文献

- 埴岡真弓 2005 “桜の下の僧”とその背景―「熊野観心十界曼荼羅」にみる説話的イメージ
絵解き研究, **19**, 77-106.
- 宮川充司 2008 熊野観心十界曼荼羅とそのルーツ (IV) ―産屋の表現形態― 椋山女学園大学
研究論集 (人文科学篇), **39**, 115-125.
- 宮川充司 2011 熊野観心十界曼荼羅とそのルーツ (VII) ―統新出諸本の分析― 椋山女学園大
学研究論集 (人文科学篇), **42**, 55-70.
- 宮川充司 2012 熊野観心十界曼荼羅とそのルーツ (VIII) ―階層的クラスター分析による小栗栖
の分類枠の検証― 椋山女学園大学研究論集 (人文科学篇), **43**, 9-21.
- 宮川充司 2013 熊野観心十界曼荼羅とそのルーツ (IX) ―階層的クラスター分析による穀屋寺
甲本の位置づけ― 椋山女学園大学研究論集 (人文科学篇), **44**, 11-25.
- 小栗栖健治 2004 熊野観心十界曼荼羅の成立と展開 塵界 (兵庫県立歴史博物館紀要), **15**,
129-242.
- 小栗栖健治 2011 熊野観心十界曼荼羅 岩田書院
- 滋賀県立近代美術館・愛媛県立美術館・世田谷美術館 2010 生誕100年特別展白州正子 神と
仏, 自然への祈り展図録
- 高橋平明 2007 熊野観心十界図の表現技法と表現解釈―相同・相違を視座として― 絵解き研
究, 20・21 (合併号), 113-136.